

なごの年か梅

五編中

13  
2919  
14





門 へ 13  
2919  
巻 14

春色籬の梅卷之十四

江戸 狂訓亭主人著

第廿七回

再遊小磯ハ夢の中ハたゞ見ざる客人のさきぐさハ  
覺ても目の前ハちつと極小思ひて若者の夢の  
正美で自身七海園を居るのさきぐさ廊中不位  
展して居るさきぐさ何れも懐くえんと思ふも  
又甚ふき男の公女の言人あふ廊の新娘

昭和九  
七月六  
辨末



情<sup>なさけ</sup>ふひのまをさるるに身<sup>み</sup>ハはのよ捨<sup>すて</sup>心<sup>こころ</sup>舟<sup>ふね</sup>あがら<sup>せ</sup>ん  
 さまよふの甲<sup>かみ</sup>斐<sup>ひ</sup>まきまき更<sup>ま</sup>ふたうりやせんと思<sup>おも</sup>ひまふら  
 積<sup>つ</sup>まべ<sup>り</sup>物<sup>もの</sup>をも言<sup>い</sup>ひ居<sup>ゐ</sup>たりいぞお清<sup>せい</sup>くたも  
 見<sup>み</sup>てうりて 橋<sup>はし</sup>へ小<sup>こ</sup>磯<sup>いそ</sup>さん松<sup>まつ</sup>があんまりをいふとまぞ  
 中<sup>うち</sup>ふお言<sup>い</sup>ひごうけがア長<sup>なが</sup>さんとやんお茶<sup>ちや</sup>太<sup>た</sup>の信<sup>のぶ</sup>ぢら  
 かあんなまらるの又<sup>また</sup>ト言<sup>い</sup>ひまそ 小<sup>こ</sup>磯<sup>いそ</sup>ハ白<sup>しろ</sup>赤<sup>あか</sup>も 小<sup>こ</sup>ツヤ  
 松<sup>まつ</sup>がそんなまりを言<sup>い</sup>ひまうりとま 橋<sup>はし</sup>へアくるんごう大<sup>だい</sup>そう

嬉<sup>うれ</sup>しそうお身を<sup>み</sup>して其<sup>その</sup>長<sup>なが</sup>さんとやらの名<sup>な</sup>を幾<sup>いく</sup>度も  
 お言<sup>い</sup>ひごうけがア長<sup>なが</sup>さんとやらの名<sup>な</sup>を幾<sup>いく</sup>度も  
 橋<sup>はし</sup>へし七<sup>しち</sup>かきまらるるヨ 橋<sup>はし</sup>へアサ更<sup>ま</sup>はせぬも入<sup>い</sup>る  
 のろふお茶<sup>ちや</sup>太<sup>た</sup>さんハどきも言<sup>い</sup>ひまらるるの毒<sup>どく</sup>ぐんまらるるら  
 まらるるら何<sup>なに</sup>も言<sup>い</sup>ひまらるるら何<sup>なに</sup>も言<sup>い</sup>ひまらるるら  
 松<sup>まつ</sup>の方<sup>かた</sup>でも物<sup>もの</sup>が言<sup>い</sup>ひまらるるら何<sup>なに</sup>も言<sup>い</sup>ひまらるるら  
 ちやアあつまらるるら何<sup>なに</sup>も言<sup>い</sup>ひまらるるら何<sup>なに</sup>も言<sup>い</sup>ひまらるるら  
 三<sup>さん</sup>松<sup>まつ</sup>も公<sup>こう</sup>賞<sup>しょう</sup>うがあらるら何<sup>なに</sup>も言<sup>い</sup>ひまらるるら何<sup>なに</sup>も言<sup>い</sup>ひまらるるら



夏とさく人小よ山とさくおらぶらぶらお茶をえのちとらふ  
 きてよとらふト頼母一きお法の言葉よ小破の嬉  
 ちく掻をさくめて 小へお法さんまをくお茶をえの心際  
 切くモくく骨身志とらふ知とらふましとらふ症は座をらよ  
 き心とらふぎとらふとさきとてあんなぬうのあままて  
 めくしとらふく可笑しくくても掻取しとらふと笑ハ  
 ちひでお茶さんまをくマート  
 是より長者とらふ思ふを掻をむきびとらふ

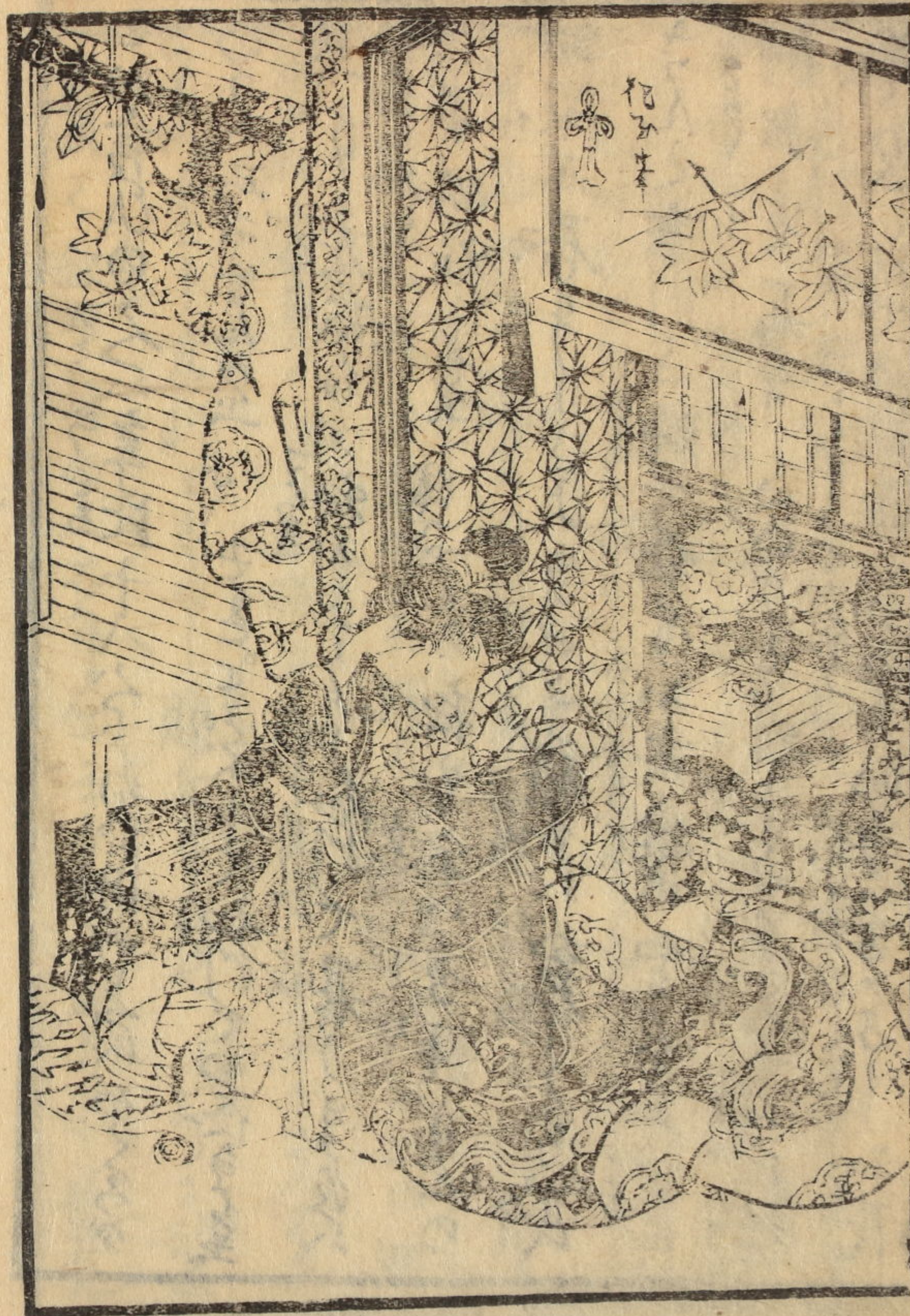
よりとらふくも長者とらふとらふと一夏まを小破の  
 世話とらふおらぶら町へ娘女勤ま中しとらふとらふ  
 兼町ま海老を交輝まらび小童一とらふとらふ  
 世話とらふまが窟へまらけ一文の抱娘とらふ  
 多しとらふとらふ一ス一十を物とらふ  
 小ふまとらふ私の親男のまらとらふとらふとらふとらふ  
 ち長さんとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
 知とらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ



おもひは 考へて 木の葉の命のいのちを  
 せめんヨト 言ひまじらるる ながさひと ながさひの  
 目元可也 古くして 孝人の 雨ふたや  
 やる 海棠の霜よりの 仙花の 顔ふ ぼろ  
 うつー 春告鳥の 美人 花の 二の町  
 まふね 小磯さん 花の ぼろ  
 言ふと 木の葉の上を するまじらるる ながさひ  
 言ふと 木の葉の上を するまじらるる ながさひ

とお言ひの 人の年比十八ぐらゐを 月の上を ながさひ  
 ありんか 木の葉の 花の ぼろ  
 花の 小磯さん 花の ぼろ  
 お家の 花の ぼろ  
 さんと言ひの 花の ぼろ  
 伴へて 花の ぼろ  
 阿の 花の ぼろ







さんも田舎とやん 性うとおは 侍どー子跡でん  
 侍も勤うとら 性一相もなぐ 只毎日侍格の  
 お母はまののお側 不務るむらう 手押もあの長者  
 さんおろのふ 若方うら子 供元のやうをみるく 何うか  
 氣が附て 深切ふしと 異んまらるうら ねも兄弟う  
 何うのやう 小島にそ 知やましく はずしづが 中 秘も  
 實の母人の 意もで お殿をお 苦ひのふしと 下と  
 所が 母人も 早くうら 根がうら 意のうら 意のうら

苦勞をばさめし ざうとふく 一筆をうらうら づらうら  
 記まうしと 三史うらと けふのふのふ 秘の身 不付て 見と  
 りふらうら みるのて 異なる 人なるしと 一人の 妹が  
 ありまうしと ぶらまも 初女 時ふと ころはと ころはと 人なる けさ  
 方も 知まじ びんぬ 樹うら 落さ 候と やらうら  
 ありまうしと ぶらま ても 以方便 なるのて 一文 なるの  
 且那が 秘ののりを 守るまのて ころはと 可成り ころはと  
 ちんこと け廊へ 町取つて 世話をしと ちん人なる







中と長さんもお前さんとお前さんとお前さん  
 なる中から存して舞ふまを お見のごヨ小判三長さんの  
 方も多 宛早松の更入んぎ多うもされてお仕業  
 だらうと思ひまはく何故とりよのふ松きやア元来  
 うら長さんのおもあや入らばたのうぬ今もあや  
 あんま古坂へおやお在らうまらうとお前ふお前を居る  
 だらうと思ひまはく 長へち三ま長さんごつてそんな  
 るらあややアはなたるめまけまごもごも男方うぬ

葉よの葉が能めんどうら娘や唄女が只ハ通さ  
 るよ。いづ子然ううと言川そそんるふ不有ふ下  
 傍人の御あるのをもり 今お前さん長さんお  
 逢門ておもの進血たきをあげて川流交こそこれなを  
 當座のたをばはままら。情人が幾人あらうと其  
 時あや長さんが見向もはなたるあつちやあつち  
 せんヨ 小判三まら。いづ一七お前やそんなあやの御前を  
 せんヨ 長へ三二出するあつちまらがあるのら。お前さんお前さん



おきまんの加勢を七長きんせけ七彼人中ま  
ねはまのけりやアまらまト思ひだたまは  
あてむらき 清ハキ ねまやアめしき  
あて思ひだたまは ねまやアめしき  
くつては合も 小十二宮う夜うあけくら  
誰人も変人のまらよまらや そふとまアウ今か  
結核のまらうまらまらまらまらまらまら  
まのう 清ハキ ねまやアめしき

一人あうらのあつよ 小ハキ ねまやアめしき  
小磯の耳へまらまらまらまらまらまら  
角のまらまらまらまらまらまらまら  
小ハキ ねまやアめしき 清ハキ ねまやアめしき  
あつよまらまらまらまらまらまらまら  
よまらまらまらまらまらまらまら  
小磯のまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまら



花多知波奈

近世 花多知波奈 初編 狂仙亭主人  
和情 三冊 富永春英作

花多知波奈 初編 狂仙亭主人  
富永春英作  
花多知波奈 初編 狂仙亭主人  
富永春英作  
花多知波奈 初編 狂仙亭主人  
富永春英作

狂仙亭主人  
富永春英作

第六八回

花多知波奈 初編 狂仙亭主人  
富永春英作  
花多知波奈 初編 狂仙亭主人  
富永春英作  
花多知波奈 初編 狂仙亭主人  
富永春英作



お母の言ふ事不承不承内澄少ても吉多勝を察略不承  
最頼母一も思ひける 吉入サテ一記枝が此所へ寄る  
喰まさい御くお母の王子むいかまこく可食がりやらく  
世帯のやけこも供どもアア 部命持雑技落葉一本 不承  
左様さぬしとねくサテく 娼妓へ 後押さすく お飯を盛碗に片ヨ  
ダイ程あふさぬまサ お茶も人もか上人さうア 雑  
まん 海老もおれ お老更さんお吉もあんなぞ 和らうさうさのせ  
とつてゆげ七果んさう一そくお茶も一折小喰まき

アイト尾より一七雑技落葉 雑技の三人お飯を喰居る  
吉多勝ハ三人がうらむはははを余念もなく見まう 雑  
さう小雑技で酒を吞で居る ぞア 早私さア お飯も  
まきて空知く一七居まう一ヨサ 老更さんお飯を一七上  
まうせう 吉入ナラくア お飯を腹の中さうわど喰てまう又  
お飯も後のゆくまうをのりまうがゆりまうの吉入ア  
お飯も後のゆくまうをのりまうの吉入ア  
お母の言ふ事不承不承内澄少ても吉多勝を察略不承  
最頼母一も思ひける 吉入サテ一記枝が此所へ寄る  
喰まさい御くお母の王子むいかまこく可食がりやらく  
世帯のやけこも供どもアア 部命持雑技落葉一本 不承  
左様さぬしとねくサテく 娼妓へ 後押さすく お飯を盛碗に片ヨ  
ダイ程あふさぬまサ お茶も人もか上人さうア 雑  
まん 海老もおれ お老更さんお吉もあんなぞ 和らうさうさのせ  
とつてゆげ七果んさう一そくお茶も一折小喰まき

吉多勝の言

吉多勝

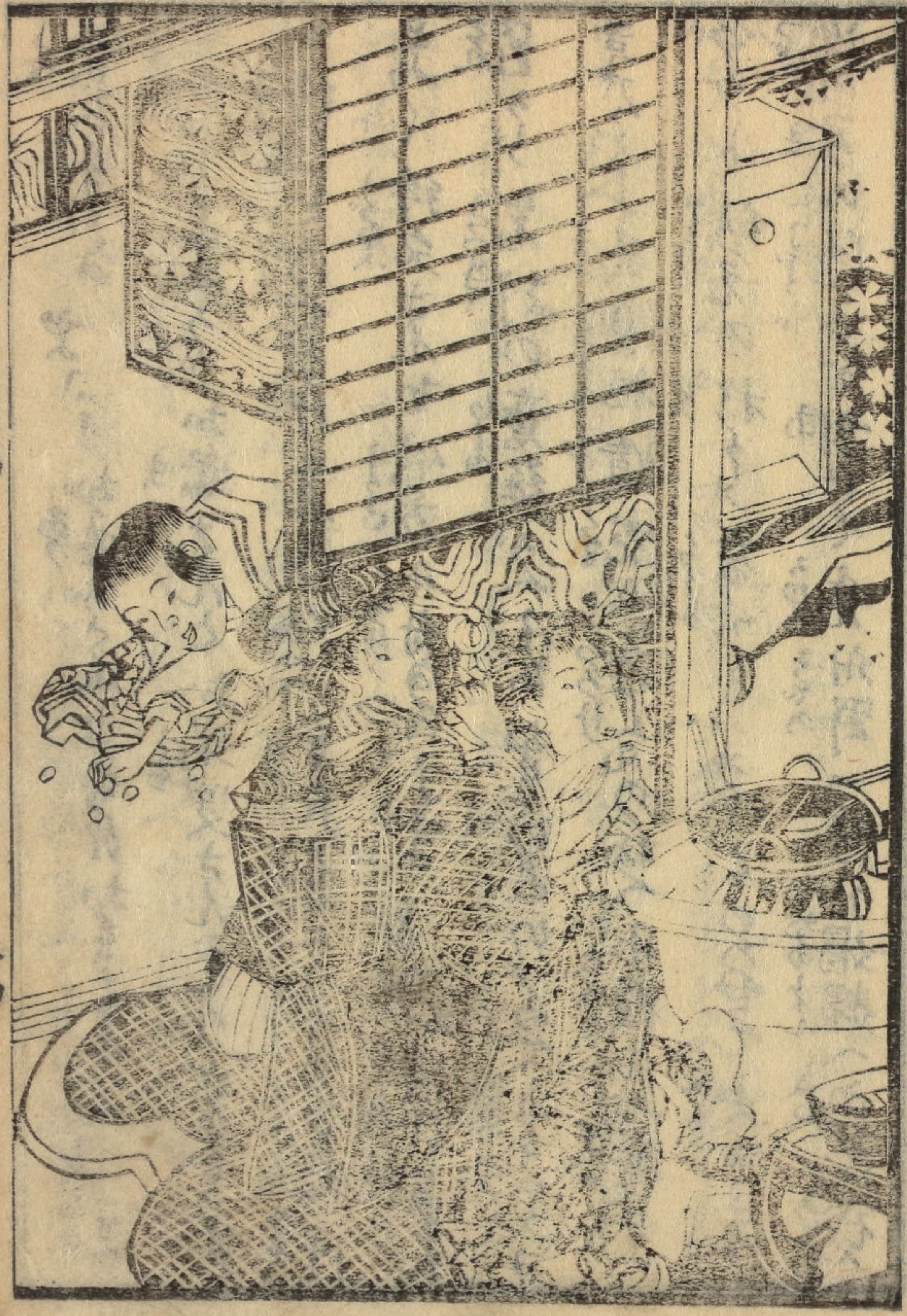






















山崎をいりて一まずと 吉一が長からう程く若く今程  
才さあきく一ツのげやせう 長一ハイとまは有象大ト言  
か 程のうをいつてひら 程の種もも其外の人ふ  
向 長一前若毎度わづがふ 程の産牛の 程一程くか  
まぬしとわくア少長さんふきんぞかしくめをみてわげ  
程んまぬし一長一 イエモ お程の自或まのまにけか程  
は返金といひて一日をう 吉一大そう程く出うけるの僕  
地がうとく程くめさく歩 身が程わく言んても高

妻をたふりふして一家の主人あでもる程屋一が程  
長一有がふ程の産牛の 程私も貴公のお影で程ふり  
志て居り牛のう 何新までも身慎いして程本  
出入のるる程いしてといひのごととぞんトて居るま  
吉一少さる程 程の程の程の程の程の程の程の程の程  
身のま程ふして程るうるんでも身慎がめんじん程  
「ア、モウ長さんハ程るる程とぞぬまよ子エ程文さん  
「ア、わん小程うぎぬまよ子程のうら二階中で長さんを

山崎をいりて

十六








男<sup>おとこ</sup>のて居<sup>ゐ</sup>るもさうぢぬまをヨ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>〜  
フ<sup>ふ</sup>〜  
フ<sup>ふ</sup>〜

柳<sup>やなぎ</sup>春<sup>はる</sup>告<sup>つ</sup>吉<sup>きち</sup>の初<sup>はつ</sup>るより籬<sup>かき</sup>の梅<sup>うめ</sup>の華<sup>はな</sup>のを志<sup>こころ</sup>ふて都<sup>みやこ</sup>  
鄂<sup>かえ</sup>を近<sup>きん</sup>の諸<sup>しよ</sup>君子<sup>くんし</sup>達<sup>たつ</sup>を就<sup>しゆ</sup>の眉<sup>まゆ</sup>を并<sup>なら</sup>き閑<sup>かん</sup>室<sup>しつ</sup>の賦<sup>ふ</sup>を  
賞<sup>あや</sup>をまもこま師<sup>し</sup>の功<sup>こう</sup>といふへさむト門<sup>かど</sup>簾<sup>れん</sup>後<sup>ご</sup>彼<sup>か</sup>五<sup>ご</sup>六<sup>ろく</sup>白<sup>はく</sup>  
札<sup>さし</sup>下<sup>げ</sup>の踏<sup>ふ</sup>踏<sup>ふ</sup>てあともまを迷<sup>まよ</sup>ぶ

先<sup>まへ</sup>確<sup>かた</sup>定<sup>ぢやう</sup>す  
例<sup>れい</sup>のあし  
著<sup>しよ</sup>永<sup>えい</sup>春<sup>はる</sup>笑<sup>せう</sup>天<sup>てん</sup>誌<sup>し</sup>  


春色籬の梅卷之十四



